Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-02

現代米国におけるアカデミック・ライティングの理論と実践に関する研究ー大学における学習支援体制に着目してー

西口，啓太

(Degree)
博士（教育学）
(Date of Degree)
2019-03-25
(Date of Publication)
2020-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7382号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007382

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式４）

論 文 内 容 の 要 旨

氏　　名　西口　啓太
専　　攻　人間発達専攻
指導教員氏名　渡邊　隆信　教授

論文題目（外国語の場合は，その和訳を併記すること。）

現代米国におけるアカデミック・ライティングの理論と実践に関する研究
－大学における学習支援体制に着目して－

論文要旨

本研究は，現代米国の大学におけるアカデミック・ライティング教育（以下，ライティング教育）の理論と実践について，教育内容，教育方法，評価方法，支援組織の観点から，その特質を解明しようとするものである。また，そこから日本の大学におけるライティング教育の改善・充実に向けた示唆を探り，提言を試みるものである。

ここでは，教室における具体的な問題解決を追求し，実践的な場面で効果的な学習を促進するための「教授（教え）と支援」を主な研究対象とする。そして，ライティングを単なる技術的問題として捉えるのではなく，学習者の認知的および情緒的資質・能力の高まりに伴い，言語によって思考や感情を正確かつ効果的に情報伝達・表現することが可能になるものとする。学習者が自らの思考力および感受性を高め，正確かつ効果的に情報を伝達・表現できるようになるために，どのような資質・能力を育むべきなのかを，主に情緒的資質の育成に着目して考察した。

本研究は，大きく２部に分けられる。第Ｉ部は，第１章から第５章までを指し，アカデミック・ライティングの理論を中心に扱う。

第１章では，1860年代から1980年代までの時期を分析対象とし，教育内容，教育方法，評価方法，支援組織の観点から，その理論的基盤の構築について明らかにした。その特徴を整理すると次のようになる。

第一に，教育内容に関しては，①米国大学において初年次ライティング科目が創設され，現在まで一般教育課程の必修科目として大学生の基盤的能力の育成に貢献してきたことである。米国大学において，独自に初年次ライティング科目を設置し，大学初年次生の論理的思考力と効果的な文章表現力の向上への使命を担ってきたことは，他国に類を見ない取り組みであるといえる。②ライティング教育が学術的な地位を確立したことである。学術専門団体が組織され，初年次ライティングを理論的に精緻化する取り組みが始まった。同時に初年次ライティング科目にとどまらない，２年次以降に続く垂直型のカリキュラムを視野に入れた新たなプログラムの開発がおこなわれるようになった。

第二に，教育方法に関しては，プロセス・ライティングという段階的かつ再帰的な教授法が開発されたことである。従来の完成作品を重視する教育観から，書く過程を重視する教育観へのパラダイム・シフトが起こり，学習者を中心とする教育観に支えられて，プロセス・ライティングは，教育実践の場面に深く根付いていった。

第三に，評価方法に関しては，①教員からのフィードバック研究が盛んにおこなわれ，学生の書いた作品に対してどのような評価や判断を下しているのかが検討されてきたことである。また，②ポートフォリオによる評価が，実践の場面に導入されるようになり始めたことである。ただし，実践の場面でポートフォリオが導入されるようになっていた一方で，評価方法に関する理論的な発展をみせるのは，1990年代以降のことである。

第四に，支援組織に関しては，基礎学力の不足した学生に対して，個別指導を施すことで，大学での高度な学びに耐えうる力を準備させる学習支援組織として土台を形成したことである。意欲のある教員によっておこなわれていた個別指導の取り組みが認められ，大学における公的な学習支援組織としての地位を築き始める。その後，リメディアル学生を対象とした治療的処置という不名誉な状況を生み出すことになり，学習支援組織としてのあり方が再考され始める。

次に，1990年代以降の現代の動向を取り上げ，４つの枠組みからライティングの理論と実践について検討した。

第２章では，1990年以降のライティング教育における教育内容として，教育目標や学習成果，個別プログラムの開発について明らかにした。第一に，教育目標について，学術専門団体から指針として学習成果声明の提言されたことである。WPAによる初年次ライティングにおける学習成果声明があり，全米規模の学術専門団体によって，ライティング教育に関する方針を提示していること，教育目標についての共通認識を築こうとしている点は注目に値する。

第二に，ライティング教育を通じて情緒的資質・能力を形成することが教育目標として提言されたことである。学術専門団体が協働で発表した声明の中では，８つの思考態度を涵養することを目指すことが提言されており，現代米国のライティング教育の動向を示すものといえる。ここでは，学習者の情緒的資質の育成を教育目標として明示しており，ライティング教育が人間形成の場として位置づけられている点を明確に表しているといえる。

第三に，個別プログラムについては，興味関心を誘発し探求心を育むプログラムが開発されている点である。学生が自己や他者，社会に深く関与し，知的好奇心を駆り立てながら興味関心を探求する機会を保証するテーマ型ライティング・プログラム，教員や学習者同士の対話的相互作用を通して，授業により深く関与することを促すストレッチ・プログラムがある。これらは，大学の大衆化や専門教育の重視の傾向により生じた，学習意欲低下や，学生の質的低下の問題への対処法として開発されたものである。

第３章では，ライティングの教育方法として標準化しているプロセス・ライティングと，教育実践の場面で，学生の動機づけを高め，相互作用を促進する具体的な手法として活用される，ピアレビューと自己調整スキルを検討した。第一に，少人数クラスによる運営が基本方針として提言されており，それ適合したプロセス・ライティングが，依然として標準的な教育方法として定着していることが明らかになった。現代の米国大学におけるライティング科目では，学生が文章を書くプロセスを重視し，自己や他者との対話的相互作用を再帰的におこなうことで，書き手自身が思考を深め，文章表現力を高めることが重要視されている。

第二に，動機づけを高める手法として，対等な立場にある学習者仲間が互いの文章を検討し合うピアレビューが積極的に活用されていることがわかった。米国のライティング教育の特徴である対話的相互作用を促進し，学生が自身の文章を効果的に推敲できるように，ピアレビューを導入する適切な時期や条件が検討されるようになっている。

第三に，自己調整スキルの獲得を目指したライティング方略の指導がおこなわれるようになったことを明らかにした。SRSDモデルのように，学生が文章を書く行為をコントロールする能力，つまり自己規律（self-discipline）の獲得を促進するような教育方法が注目されるようになった。書くという行為は，計画的かつ長期的な訓練によって培われるため，自身の興味関心を維持し，粘り強く思考や感情，資料と向き合う姿勢を要求する点に応じたものである。

第４章では，ライティング教育による学習成果をはかる一般的な評価方法について明らかにした。ここでは，主に評価指標であるルーブリックと，形成的な評価であるフィードバック，学習者の努力値をはかる評価について検討した。第一に，客観性の高い評価を成立させるためにルーブリックの開発と運用が積極的におこなわれていることである。1980年代にポートフォリオ評価による学生の書くプロセスの発達度や成長プロセスを示す評価法が米国で広く取り入れられる。そして，学生の作品や文章表現力，その発達のプロセスの評価の客観性を担保する手法として，評価指標であるルーブリックの開発が進み，標準化した。

第二に，学生の書き手としての成長を促進する評価手法として，フィードバックに関する研究が進展したことである。フィードバックを単に文章を修正すると捉えるのではなく，教員やピアとの社会的相互作用を通じて，大学の文化に円滑に移行する手助けをしたり，他者からの助言を受けとる学習姿勢，つまりレディネスの形成に効果がある点が注目されるようになる。

第三に，情緒的資質の形成に着目した評価方法が検討されるようになったことである。努力値を基準にした評価が検討され始めており，学生の知的成長意欲や発達度を正確に評価しようとする動きがうかがえる。ただし，こうした評価方法は，まだ十分に検討されているわけではない。

第５章では，正課カリキュラム外の支援組織であるライティング・センターについて検討し，その実態と機能について考察した。第一に，センター・フォー・ライティングエクセレンス（CWE）といった新たなライティング・センターのモデルが設立されるようになったことである。これは，より多くの学生の文章表現力の向上を支えようとする学習支援組織としてあり方の変容に伴うものである。そして，より高度な支援を提供する学習支援組織として，ライティング・センターが発展し続けていることを象徴している。

第二に，ライティング・センターの実務を担うスタッフの概念転換が起こったことである。1990年頃を境にスタッフに関する議論がおこなわれるようになり，長く一般的であったチューターから，学生に限らず大学コミュニティに関わるすべての書き手を対象に，より専門的な支援を提供するコンサルタントへの概念転換が起こる。これまでは先進的にライティング・センター改革に取り組む大学において採用される傾向にあったが，WCRPの調査によると，スタッフをコンサルタントとして扱うライティング・センターが大部分を占めるようになったことがわかる。コンサルタントへの発展も，より専門的かつ書き手に寄り添った支援を提供しようとするライティング・センターの学習支援組織としてのあり方の高度化を意味する。

第Ⅱ部は，第Ⅰ部で検討した４つの理論的枠組みから，個別大学の教育実践の事例を考察す

るものである。米国のニュージャージー州にある４年制の総合大学であるモントクレア州立大学を取りあげて具体的に分析し，初年次におけるアカデミック・ライティングの指導と評価について確認した。そして，同大学におけるライティング・センターを取り上げ，学習支援組織としてのあり方について検討した。

第６章では，モントクレア州立大学初年次ライティング・プログラムを，教育内容，教育方法，評価方法の３点から分析した。第一に，教育内容については，テーマ型ライティングを用いた初年次ライティング・プログラムを実施していることを明らかにした。学生が自身の興味関心や知識経験を，テーマやトピックに統合するプロセスを通じて，自己や他者，社会への認識を深めながら自己規律の獲得する。このような自己成長の結果として，効果的な文章表現力を育成しようとしていることがわかる。

第二に，教育方法については，標準的な指導法であるプロセス・ライティングに加えて，授業のユニット化による再帰的に文章を書くプロセスを経験させる手法を用いていることがわかった。15週間30回の授業を３つのユニット（単元）に分割し，書くプロセスとピアレビュー，フィードバックをくり返し経験して作品を完成させる。文章を書き直す過程で，教員やピアとの対話的相互作用を通じて，認知的および情緒的資質・能力を育むプロセスを促進する機会を初年次ライティングの中で確保しようとしていた。

第三に，評価方法については，「推敲」の観点を取り入れたルーブリックの作成にみられる，情緒的資質・能力を測定する試みをおこなっていることである。これは，学生の成長意欲や発達度を努力値によって評価しようとするものであるといえる。このような努力値を基準にした評価によって，情緒的資質を評価する方法を検討していることがわかる。

第７章では，モントクレア州立大学ライティング・センターを，支援組織の観点から検討した。第一に，近年のライティング・センターのモデルである，センター・フォー・ライティングエクセレンス（CWE）を採用していることが特徴としてあげられる。学習支援組織としての大学コミュニティに利益を還元できるようにセンター改革を推進し，最先端のモデルであったCWEを採用して，より幅広い書き手に高度な支援を提供する学習支援組織として再始動した。同大学CWEは，２つの認証制度を受けており，質の高い研修プログラムを提供するものとされており，学習支援組織としての高度化を進めていることがわかった。

第二に，スタッフを専門職モデルであるコンサルタントとして養成しているという特徴がある。モントクレア州立大学CWEでは，３つの研修制度によって，コンサルタントを養成していることが明らかになった。①２つの事前研修では，コンサルタントとしての基本的な心構えを形成することを試みている。次に，②３段階の研修制度では，新人コンサルタントは，先輩コンサルタントとチームを組み，互いに長所を学んだり，不足を補い合ったりしながら学び合う構図が組み込まれている。そして，③週ミーティングでは，専門性の開発と継続的な学びの機会を保証している。研修制度や週ミーティングによって，有能な人材の確保と維持のサイクルを作り出しているといえる。モントクレア州立大学の事例からは，米国大学ライティング・センターが，学習支援組織として高度化を目指す姿がうかがえる。

終章では，本論での考察を踏まえながら，本研究のまとめとして，現代米国の大学におけるライティング教育の特質について論じた。その上で，大学におけるアカデミック・ライティン

グの教育内容，教育方法，評価方法，支援組織の課題を明らかにし，日本の教育を改善・発展させるための知見を示した。

（氏名　西口　啓太　，No. 5 ）

［課程博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　　名	西口 啓太		
論文題目	現代米国におけるアカデミック・ライティングの 理論と実践に関する研究 －大学における学習支援体制に着目して－		
判　　定	(合　格)・不　合　格		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	主　査	教　授	渡邊　隆信
	副　査	教　授	船寄　俊雄
	副　査	准教授	山下　晃一
	副　査	准教授	川地　亜弥子
	副　査	准教授	目黒　強

要　　旨

本論文は、現代米国の大学におけるアカデミック・ライティング教育（以下、ライティング教育）の理論と実践について、教育内容、教育方法、評価方法、支援組織の4つの観点から、その特質を明らかにした研究である。また、そこから日本の大学におけるライティング教育の改善・充実に向けた示唆を探り、提言をおこなったものである。

論文の構成は第Ⅰ部と第Ⅱ部からなり、第Ⅰ部（第1章～第5章）では、ライティング教育の理論を中心に扱った。

第1章では、1860年代から1980年代までの時期を分析対象とし、教育内容、教育方法、評価方法、支援組織の4観点から、米国におけるライティング教育の理論的基盤の構築過程を明らかにした。

続く第2章から第5章までは、主に1990年代以降の動向を取り上げながら、上記の4つの観点からライティングの理論について検討した。第2章では、ライティング教育における教育内容として、カリキュラム上の位置づけと目指される学習成果について明らかにした。ここでは、主にライティング教育の学術専門団体であるWPAによる初年次ライティングに関する声明を中心に論じた。また、カリキュラムの一部として、個別のライティング教育プログラム（テーマ型ライティング・プログラム等）を取り上げ、その特徴を明らかにした。第3章では、ライティングの教育方法として標準化しているプロセス・ライティングについて検討した。また、ライティングの教育実践の場面で、学生の動機づけを高め、相互作用を促進する具体的な手法として活用される、ピアレビューと自己調整スキルを取り上げた。第4章では、ライティング教育による学習成果をはかる一般的な評価方法について明らかにした。ここでは、主に評価指標であるルーブリックと、形成的な評価であるフィードバックについて検討した。さらに、学習者の努力値をはかる評価の視点が検討されている点を取り上げ、情緒的側面に着目した評価についても論じた。第5章では、正課カリキュラム外の支援組織であるライティング・センターについて検討し、その実態と機能について考察した。

続く第Ⅱ部では、第Ⅰ部で検討した4つの理論的枠組みから、個別大学の教育実践事例を考察した。第6章では、ライティング教育において実績と定評のあるモントクレア州立大学を取り上げ、同大学の初年次ライティング・プログラムについて、現地で収集した資料とインタビュー調査をもとに、①教育内容、②教育方法、③評価方法の3点から分析した。第7章では、同大学ライティング・センターを④支援組織の観点から検討し、スタッフが専門職モデルであるコンサルタントとして養成・研修されていることを明らかにした。以上のように、本研究の独自性としては、現代米国大学におけるライティング教育の理論と実践を、学習支援体制に着目して、4つの枠組みで包括的に検討したことがあげられる。

終章では、本論での考察を踏まえながら、本研究のまとめとして、現代米国の大学におけるライティング教育の特質について論じるとともに、大学におけるアカデミック・ライティングの教育内容、教育方法、評価方法、支援組織の課題を指摘した。さらに、米国のライティング・プログラムとライティング・センターの特質を踏まえ、日本のライティング教育に関して、学習者が正確かつ効果的に意見を表現したり、情報を伝達する力を向上させるための知見を示した。

なお、西口啓太氏には、本課程博士論文に直接関係する査読付き学術論文5編があり、これらは課程博士論文の内容が学術研究として一定の新規性と独創性を有していることの証左である。

1)西口啓太（2015）「アメリカ合衆国の初年次教育におけるアカデミック・ライティングの評価法－ケンタッキー大学におけるライティング・プログラムとその評価法に着目して－」初年次教育学会『初年次教育学会誌』7(1)、pp.119-126.

2)西口啓太（2016）「アメリカ合衆国におけるアカデミック・ライティングとその評価－ライティングを通じた学生の情緒的発達と評価活動としてのフィードバックに着目して－」初年次教育学会『初年次教育学会誌』8(1)、pp.157-165.

3)西口啓太（2018）「米国大学の初年次ライティング指導における学習者への動機づけの効果と課題－プロセス・ライティング指導に着目して－」神戸大学教育学会『研究論叢』24、pp. 67-77.

4)西口啓太（2018）「アメリカ合衆国の大学における初年次ライティングの教育実践に関する一考察－モントクレア州立大学の事例に着目して－」日本教育実践学会『教育実践学研究』20(1)、pp. 9-21.

5)西口啓太（2019）「米国大学におけるライティング教育の歴史的変遷－1860年代から1980年代までの学習支援体制の視点から－」神戸大学発達科学部教育科学論講座編『教育科学論集』22、（印刷中）.

よって、本審査委員会は、学位申請者西口啓太氏は、博士（教育学）の学位を得る資格があると認める。